

## 日本藻類学会第 32 回大会開催記・参加記

### 第 32 回大会実行委員会：大会を終えて

2008年3月21日～24日までの4日間、東京海洋大学海洋科学部(品川キャンパス)において日本藻類学会第32回大会を開催致しました。本学の前身である東京水産大学時代には、第2回(1979年)、第3回(1980年)および第16回(1992年)に開催されておりましたが、2004年に東京海洋大学となってからは初めての開催であり、関東地区では第26回(産業技術総研, 2002年)以来、久々の開催となりました。かつては品川村と呼ばれた東京はずれのキャンパスではありますが、今や品川駅に東海道新幹線が停車し、駅周辺の再開発も進んで高層ビルが立ち並び、大きく様変わりしました。ただ、キャンパス内には緑も多く残り、建物の多くも昔のままで、都市化の波に驚かれた人も、懐かしいキャンパスにほっとされた人もいらっしやったことと思います。

本大会では、3月22～23日に142題(口頭発表84題, ポスター発表58題)の発表があり、244名の方が参加されました。また、これとは別に、22日には公開シンポジウム「海藻の社会・経済的インパクト」6題が開催され、また、前日(21日)には共催シンポジウム「藻場を見守り育てる知恵と技術」15題のシンポジウムが開催され、それぞれ約150名の方が参加されました。これらを合わせますと、約400名の方々が大会期間中にお越しいただいたこととなります。兎にも角にも、多くの方々に足をお運びいただき、また、陰になり日向になりお手伝いいただき、有難うございました。

大会はすべて東京海洋大学の講義棟の教室と大講義室で行われ、口頭発表はA, B会場で、ポスター発表は上階の3会場で進行しました。口頭発表の座長は、その大半を新進気鋭の若手の研究者にお願いし、活発な議論を行っていただきました。ここ数年は、本大会も参加人数が200名を優に超えるようになり、

今回のように2会場制としても、それぞれ100人規模の部屋を用意しなければならないのが実情です。なお、今回、エレベーターのない講義棟でしたので、年配の方に3階や4階まで歩いて登っていただくのはかなりきつかったかもしれません(筆者も往復を幾度となく重ねて足が痛くなりました)。

23日夕刻には、無事に総会も終わり、ほぼ定刻に懇親会を開催することができました。懇親会は、キャンパス内の大学会館で、何の変哲もない料理を囲みながら、満員電車のような混雑状況の中で行われました。会は、本学出身者、坂西芳彦氏(北海道区水研)の司会で始まり、川井浩史先生(神戸大, 学会長)、能登谷正浩先生(海洋大, 大会長)による歓迎の挨拶の後、有賀祐勝先生(東京水産大学名誉教授)に乾杯の音頭をとっていただきました。また、宴もたけなわの頃、本学会の会員であり、東京海洋大学の新学部長(2008年4月～)に就任が決まっていた小川廣男先生にも歓迎の挨拶をいただき、さらに、第33回大会をお引き受けいただいている須田彰一郎先生(琉球大)から沖縄大会のご案内がありました。

振り返ってみますと、本大会の特徴は、趣向の異なるシンポジウムとワークショップを2つずつ組み込んだことであつたかと思ひます。

シンポジウムの1つ「海藻の社会・経済的インパクト」は、本大会長が皆様にお送りしたメッセージでした。大会の中心となる時間帯に公開形式(会員無料, 一般有料)で開催し、海藻の流通・経済, 成分の健康機能性, 抽出物の利用, バイオマス燃料, 水産施策というように(本誌56巻第1号102～103頁に要旨掲載), 本学会の目指す生物学とは異なる様々な角度から、各界の第一人者の方々に解説していただきました。テーマといい、演者の顔ぶれといい、東京ならではのシンポジウムで、日頃



口頭発表会場



ポスター発表会場



懇親会会場

生物学に没頭している学会員の皆様にとっても、新鮮な企画だったのではないのでしょうか。

もう1つのシンポジウム「藻場を見守り育てる知恵と技術」は、いわば本大会の前夜祭のような形で行われ、全国磯焼け対策協議会（事務局：水産庁漁港漁場整備部整備課）が主催し、本学会のほか、日本水産工学会、東京海洋大学、（財）水産土木建設技術センター、（財）全国豊かな海づくり推進協会、（独）水産総合研究センターに共催していただきました。ここでは、「長期モニタリングが捉えた藻場の変動」、「藻場の衰退原因を探る」、「藻場回復の支援技術」の3本立てで、全国各地の第一線で活躍されている方々に具体的な事例を紹介していただきました（本号129～138頁に要旨掲載）。

2つのワークショップ（I・II）のうち、ワークショップIでは、ほぼ全面的に本多大輔先生（甲南大）にお願ひし、「分子系統解析の基礎と実践」について講義並びに実技指導をやっていただきました。分子系統関連のワークショップは過去にも開かれておりますが、もっと基礎から学びたいという要望を受けての、初心者を対象としたワークショップでした。今回は、23名の参加があり、パソコンを持ち込んでの懇切丁寧な指導がありました。藻類においては、微細藻類、大型海藻を問わず、種の正確な同定には分子系統解析の技術が欠かせなくなっており、このような普及指導は有難い限りです。

一方のワークショップIIは、いわゆるエクスカッション形式で、東京近辺にありながら一般の人があまり訪れることのない東京海洋大学水圏科学フィールド研究教育センター館山ステーション（館山市坂田）をバスで訪れ、「海藻と付着性微細藻類（珪藻・藍藻・渦鞭毛藻・ハプト藻・鞭毛虫）の分類と生態」に関する講義、採集、顕微鏡観察が行われました。この企画には37名が参加し、準備と指導では、河地正伸先生（国立環境研）のほか、堀口健雄（北大）、宮下英明（京都大）、中山剛（筑波大）、横山亜紀子（山形大学）、田中次郎（海洋大）、鈴木秀和（海洋大）の諸先生に多大なご尽力をいただきました。見学や採集のエクスカッションはこれまでもありましたが、海藻の研究室では微細藻類が語られず、微細藻類の研究室では海藻が語られない中で、そ



公開シンポジウム会場（進行役の能登谷先生）

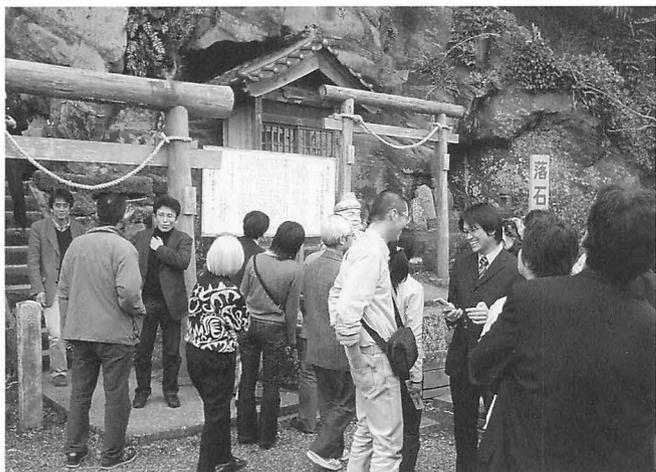
の両者の醍醐味を共有する、藻類学会ならではの試みであったと思います。生物材料は「所変われば品変わる」ので、今後も各地で同様の企画を開催していただければ嬉しい限りです。

ところで、肝心の本大会の口頭発表、ポスター発表についてですが、筆者（藤田）の不幸により、前例のないほど多くの方々にご迷惑をかけてしまいました。度重なる出張で不在続きとなる中で、見づらい整理表を作り、夜な夜な一人で受け付けていたのが原因で、口頭発表とポスター発表を10件近く受け間違えてしまいました。この場を借りて、深くお詫び申し上げます。また、それにもかかわらず、臨機応変の対応をして下さった座長の方々、演者（被害者）の方々に厚くお礼申し上げます。

そんなこんなでバタバタしていた学会でしたが、今後の大会開催の参考になれば、と思い、いくつか、気のついたことを最後に書き留めておきます。

1. 今回（上記）のようなトラブルを避けるために、申込＋講演形式はダブルチェックすべきで、受付と要旨担当というように、複数人間で行うことをおすすめします。特に、速やかな対応・確認のため、出張の多い人間による申込受付はやめた方がよいと思います。また、筆者のパソコンは学内・学外を問わず、Macから送付されたメールの添付を排除してしまう性癖があるのですが、このようなパソコンによる受付もやめた方がよいです。
2. 今回は、学会長の指導もあり、主著者としての非学会員（多くは学生）の発表を禁じ、事前申込時のチェックを徹底しました。中には、「2、3の発表を聞いただけなのだが参加費を払わなければならないのか」と受付嬢を悩ませたケースもありましたが、この場合も参加費は徴収しました。学会の健全な運営のため、ご協力をお願いすべきです。
3. 以下、申し込みのルールも決めておいた方がよいように思いました。

(1)まとめ申込や代理申込をする研究室がいくつかありましたが、予め本人からの「1人1メール申込」を徹底し、特に、学生にまとめて申し込ませることはやめてもらうべきです。就職活動や病欠などで返信しても返事がなく、往生しました。また、指導教官の与り知らぬところで学生が申し込みキャンセルした例、



ワークショップ II (竹岡「ヒカリモ発生地」)

申し込み以降に全く連絡が取れず要旨が間に合わなかった例などがありましたので、学生会員には、申込時に指導教官のメールをccに記入して送るようにしてもらおう方がよいです。

(2) 読めないような汚い(あるいは小さい)字の手書きの申込をPDFやFAXで送られて困りました。基本はワープロ入力した参加票の電子メールとして徹底すべきです。余談ですが、筆

者のオフィスの機器と相性の悪い機器から送られたFAXが受信できず、何度も呼び出し音が鳴り続けるのには閉口しました。なお、今回は、前回までにならない、講演要旨もメールだけでなくFAXで送ってもらうことにしましたが、実際にはFAXは不要と思われます。メールにおいて、貼付ならいざ知らず、添付であれば文字化けはほとんどないし、本人の責任ということで処理した方がよいと思います。お互いに「紙と時間と労力の無駄」と思いました。なお、メールは便利な通信手段ではありますが、誤字脱字、あるいは共著者の取捨などの関係で、著者から何回も要旨を送り直される場合があります。混乱のもとなので、受付は1回に限る旨を注意しておくべきでしょう。

筆者個人としては、第18回富山大会以来の学会開催でしたが、それ以降、大会は参加者が増加の一途を辿り、また、多様化し、若い世代も増えていることを体感しました。今後とも正確かつスムーズな事務処理ができるようにしていく必要があると思います。

第32回大会の実行委員会は下記の通りです：

能登谷正浩(大会長・公開シンポジウム)、田中次郎(要旨集・ワークショップII)、大葉英雄(会計)・鈴木秀和(会場)、藤田大介(実行責任・共催シンポジウム)。このほか、大会では、東京海洋大学の藻類学教室、応用藻類学研究室の学生やOB諸氏に全面的にご協力いただきました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。

(文責：藤田大介)

## 藻の見遊山

### 特別展

## 「海からの恵み 海藻 —広がる未来への夢—」

2008年7月12日(土)～9月23日(祝)

三重県鳥羽市にある海の博物館では、7月12日(土)より2ヶ月ほどの期間、海藻の幅広い利用を紹介する特別展「海からの恵み 海藻 —広がる未来への夢—」を開催しています。古代からどのような海藻類を利用してきたのか、現代の海藻利用はどのような品々に生かされているのかなどを紹介するとともに、これからの海藻類の活用について考えてみようという特別展です。会場には、20数点の食用海藻のおしば標本や海松文様(左写真)、ヒジキ縞、貝海藻文などの海藻にちなんだ文様を使った資料も展示しています。多くの子供たちに海からの恵みである海藻について興味を持っていただけることを願っています。

(平賀大蔵)

#### 【海の博物館】

所在地：三重県鳥羽市浦村町

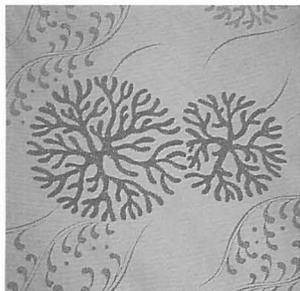
交通：JR・近鉄「鳥羽」駅下車よりパールロード経由の三重交通バスで25分「海の博物館前」下車 徒歩7分 車の場合：伊勢自動車道伊勢インターから約25キロ(25分)、パールロード麻生の浦大橋から3キロ先左折

入館料：大人800円、高校生以下400円、団体割引などあり

連絡先：〒517-0025 三重県鳥羽市浦村町大吉 1731-68 海の博物館

Tel 0599-32-6006 Fax 0599-32-5581

URL：<http://www.umihaku.com>



着物などに見られる海松の丸の文様

